

平成21年3月31日現在

研究種目：基盤研究（A）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17203026
 研究課題名（和文） グローバリゼーションと国際銀行業の展開（1900～1990年）
 研究課題名（英文） Globalisation and Development of International Banking 1900-1990
 研究代表者
 鈴木 俊夫（TOSHIO SUZUKI）
 東北大学・大学院経済学研究科・教授
 研究者番号：00139982

研究成果の概要：

本研究は、19～20世紀における先進主要国の国際銀行の歴史を対象として、その長期間にわたる営業活動を検証して、国際銀行が世界の経済発展に寄与した役割を解明するところにある。国際貿易、通信情報手段の国際的な発達、国際資本移動、国際通貨レジーム、国際金融市場というマクロ的な動きと関連させつつ、国際銀行の経営というミクロ的な動きを総合的にとらえるところに方法上の特徴がある。また、本研究には国際銀行の内部経営文書や政府公文書という一次資料が可能な限り利用されている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	6,900,000	2,070,000	8,970,000
2006年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
2007年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
2008年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
年度			
総計	24,600,000	7,380,000	31,980,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：国際銀行 国際金融市場 外国為替 マーチャント・バンク 英系海外銀行 グローバリゼーション 国際金本位制 国際電信網

1. 研究開始当初の背景

国際銀行史の先駆的な研究は、戦前に行われた A. S. J. Baster, *The International Banks* (1935) であるが、利用資料は英国議会報告書や英国財務省文書に限られ、国際銀行の内部経営文書が用いられていない。内部経営文書を本格的に利用した最初の研究は G. Jones, *British Multinational Banking, 1830-1990* (1993) であるが、これは国際銀行を多国籍企業体としてとらえ英国の対外直

接投資の一形態と考えており、国際金融市場との関連や非英系国際銀行との競争関係などを視野に入れていない。F. H. H. King 執筆の4巻の香港上海銀行史（1987～91年）は外債発行との係わりが過度に重視され、外国為替取引を考慮した国際銀行の全体像の把握に難点がみられる。チャータード銀行の行史 (Compton Mackenzie, *Realms of Silver*, 1954) とマーカント銀行の行史 (Stuart Muirhead, *Crisis Banking in the*

East: The History of the Chartered Mercantile Bank of India, London, & Chin, 1996; Edwin Green & Sara Kinsey, The Paradise Bank - The Mercantile Bank of India, 1893-1984, 1999)は国際銀行の外国為替取引に注意を払ってはいるものの、銀行間競争と支店レベルでの活動分析が不足している。ユーロ市場史については、C.R. Schenk, "The Origins of the Eurodollar Market in London, 1955-63" (Explorations in Economic History, 35-2, 1998)が、一次資料を用いた唯一の本格的な研究であるが、貸手・借手の分析が不十分である。

一世紀に及ぶ長期のスパンで、複数国の国際銀行の活動を一次資料により、かつマクロとミクロを組み合わせた分析枠組みから行う研究は、今日まで類例を見ない。本研究は分析視角の独創性において、また利用資料の点でも、世界的に最先端をいく研究であると言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19～20世紀における主要国の国際銀行の歴史を対象にして、長期間にわたる営業活動を検証し、世界の経済発展に寄与した役割を解明するところにある。

従来の国際銀行史の研究は、長期資本の国際移動の媒体としての側面を重視してきた。しかし、国際銀行の主要な業務は貿易金融と外国為替取引にあり、これらが利益の主要源泉であった。したがって国際銀行の業務と利益の動向は、19世紀末からの「第一次グローバリゼーション」や1980年代以降の「第二次グローバリゼーション」の動きを反映した。また、国際銀行自身がグローバリゼーションを促進し、各国経済がこの影響を強く受けようになったことが留意されねばならない。貿易金融、外国為替取引、国際的な証券発行と取引、国際短資移動、移民送金などが国際銀行の中心業務となり、国際銀行業を成長性と利益率の高い事業分野とした。そこで各国の国内大銀行もこの分野に参入し国際的な事業展開を行うようになった。

3. 研究の方法

本研究方法の特色は、以下の点にある。①国際貿易、国際資本移動、国際通貨レジーム、国際金融市場というマクロ的な動きと関連させつつ、各国国際銀行のミクロ的な動きを総合的にとらえる。②歴史的な観点から長期のスパンを設定して、「第一次グローバリゼーション」期、「デグローバリゼーション」期、「第二次グローバリゼーション」期、それぞれの時期における国際銀行のビジネス・モデルを対比して、その特徴を示す。③従来の国際銀行業の研究は二次的文献資料、

ジャーナリズムの記事や解説に頼るものがほとんどであり、関係国際銀行の内部資料や「30年ルール」のもとで利用可能になった各国政府および中央銀行の資料を利用するものは稀であった。本研究は、一次資料を可能な限り追求し活用する方法を採用する。

具体的には、①国際銀行の本支店レベルでの為替取引、証券発行・取引、預金・貸出などの動きを検討して、国際銀行の利益源泉を解明し、各国経済に与えたインパクトを示す。②各国国際銀行間の競争状況や経営過程を明示して、「グローバリゼーション」期と「デグローバリゼーション」期に対応したビジネス・モデルを構築する。③これまで詳細な研究が少なかった、戦間期以降の英系国際銀行の再編や米国国内大銀行の国際銀行業への転進過程を明らかにする。④1960年代以降に出現する超国家市場＝ユーロ市場の成立と発展過程を、出来る限りB I Sなどの関係内部資料から跡付ける。

4. 研究成果

(1) 国際銀行業のバックグラウンドとなる基礎概念の解明：「グローバリゼーション」、労働・資本移動といったマクロ経済上の変化、経済活動のインフラとなる運輸・通信の発達、金融市場や幣制といった経済的な諸制度の発達を具体的に示した。運輸・通信の技術革新が国際経済を加速化させてヨーロッパとアジア間の貿易を拡大させ、19世紀後半の「第一次グローバリゼーション」を生み出した。この結果、資本と労働の国際的な移動の拡大が進んだ。地球を跨ぐ海底電信線の敷設が商取引時間の大幅な短縮をもたらした。電信送金の導入など資金循環の面で国際銀行や貿易商社の経営を加速化させた。

(2) ロンドン払手形とロンドン金融市場(割引市場)の役割を究明：第一次世界大戦前の国際金本位制＝「ポンド体制」の運営において中心的な役割を果たしていたのがシティ金融機関である。当時のシティは多角的貿易決済機構の下に取引の決済が集中し、国際金融センターとしての役割を果たしていた。マーチャント・バンクmerchant banks, ロンドン手形交換所加盟銀行London clearing banks, 英系海外銀行British overseas banksのロンドン(本)店、外国銀行foreign banks ロンドン支店は、ロンドン払手形bill on Londonとして外国から振り出されたポンド建手形の支払いを引き受けた。この信用にもとづき、ロンドン手形交換所加盟銀行からコール・マネーを預かるビル・ブローカーbill brokersや割引商会discount housesから構成されるロンドン割引市場London discount marketが、これらの手形を買い取り割り引いた。

そうすると、「ロンドン払として振り出さ

れた手形が発展し複雑化した機構の基軸とな」り、ポンド建のロンドン払手形が国際取引において重要な役割を果たすようになった。この結果、ポンド建てロンドン払手形は、国際貿易金融上最もすぐれた支払手段として、19世紀から20世紀の国際金融市場において最高の地位を占めることになった。

ロンドン所在の金融機関が信用状の発行を介して授与する信用にもとづく外国為替手形の引受は、輸出業者に商品の船積みと同時に代り金の入手を可能とし、ロンドン割引市場がこれらの手形を割引いた。国際取引で振り出された手形の最終的な決済は、ロンドン払手形を利用してシティのコレス先の金融機関の帳簿上の残高である「ロンドン・バランス London balance」上で行われるようになった。決済が集中することで、シティは「国際的な手形交換所」international clearing house の役割を果たすようになった。こうしてロンドンには世界貿易に中心的地位を占める、最大の国際金融センターへと成長を遂げた。

ロンドンを中心とする国際金本位制の階層的な通貨体制の下で、インド、海峡植民地、蘭領東インドなどに見られた銀本位制は金為替本位制へと向かったものの、中国においては依然として銀本位制が堅持され、変動相場制による為替制度が取られた。

(3) 新たな視点から、ヨーロッパアジア間の金融取引に従事した英系国際銀行主要4行（東洋銀行、香港上海銀行、チャータード銀行、マーカントイル銀行）の詳細な経営史と経済的なパフォーマンスを記述：①英系国際銀行の前史となる「特許銀行制度」が分析され、王室特許状の内容、大蔵省の規制、特許状に代わる株式会社法の制定などが示された。②アジアにおける貿易金融や資本取引に君臨した東洋銀行の詳細な経営史が解明された。同行は1884年に破綻をみるが、その原因として銀価格下落への対応の不備、外債投資の失敗、現地貸付の固定貸化などが指摘された。③香港上海銀行の設立から1913年までの歴史が分析され、同行の外国為替業務とロンドンにおける外債発行業務が詳述され、さらにハンブルク支店がアジア貿易で果たしていた業務内容を調査し、ロンドン金融市場における引受信用の意義を別掲した。④創設から1913年までを対象に、チャータード銀行のアジア諸支店の活動が支店貸借対照表や損益計算書の分析を通じて示された。⑤同様の手法で、チャータード・マーカントイル銀行のアジア諸支店の営業活動を、破綻に至る1892年まで解明した。破産後、特許会社から株式会社形態で再建されたマーカントイル銀行の1913年までの営業活動が究明された。⑥19世紀後半から20世紀初頭にかけての時期を対象に

英系海外銀行の総資産利益率と株価収益率を算出することで、銀行営業のパフォーマンスの観点から、アジア以外の地域を営業対象とした英系海外銀行の営業活動と比較した。

(4) 英系国際銀行との競争関係の中から、独系、仏系、日系の国際銀行の営業活動を具体的に解明：①ドイツ銀行および国内主要銀行が出資した独亜銀行の東アジア（とくに中国）における営業活動（貿易金融および鉄道投資）を明らかにした。②パリ割引銀行、露清銀行、インドシナ銀行を取り上げ、収益性の面で仏系国際銀行の業務が貿易金融よりも現地貸付や投資業務に偏重したことを実証的に明示した。③生糸の欧米輸出金融に偏った横浜正金銀行の研究史を反省して、貿易史の成果を援用して、同行のアジアにおける活動として、これまで未解明であった神戸支店と大阪支店の紡績金融への関与について分析した。

(5) 戦間期のロンドンおよびニューヨーク金融市場の構造変化と国際銀行の活動を提示：1925年4月の英国の金本位制復帰を契機に再建金本位制が成立した。再建金本位制は、金貨本位制から金地金本位制への移行という通貨制度上の変化にとどまらず、国際通貨がポンドとドルへ二極分化し、国際金融市場がロンドンとニューヨークへ分裂するという国際金融制度の構造的変化の下で、基軸通貨ポンドを脆弱化させた。他方で、米国は第一次世界大戦終結直後には国際収支調整をほぼ円滑に行っていたが、1928年後半から調整不能に陥り、国際通貨として台頭したドルは脆さを露呈した。戦間期のポンドとドルの動きを中心として再建金本位制の展開過程が詳細に示された。

上述した国際通貨制度を下に、米国ナショナルアーカイヴズ保存の横浜正金銀行ニューヨーク支店捕獲文書を利用して、戦間期の外国為替取引を介した、ロンドンおよびニューヨーク短期金融市場と横浜正金銀行との具体的な取引関係が明らかにされた。

(6) 第二次世界大戦後のユーロ市場の出現と再編された国際銀行（ユーロ・バンク）との取引構造の究明：イングランド銀行、国際決済銀行（バーゼル）、TSBロイズ銀行のアーカイブズを調査して、ユーロ市場の形成過程が分析され、マーチャント・バンク、英系海外銀行、米系大預金銀行の同市場への参入過程が、十分ではないものの相当程度示された。

第二次世界大戦後米国の経済力はヨーロッパ諸国をはるかに凌ぎ、ニューヨークは国際金融の中心市場たる地歩を固めつつあったが、シティは変化した国際金融の環境に十分適応して、ユーロ・달러市場を積極的に取り込み、国際金融センターとしての地位を守ろうとした。第二次世界大戦後、ドルに比

して公的準備として保有されるポンドが急速に減少して行った事実を認め、これに対する対応策として、ポンドに代わり中心的な国際通貨となったドルを取引する市場を創設することで、シティの権益を確保しようとした。ドルは基軸通貨となったが、ユーロ・달러を中心としたロンドン市場が拮抗してきたため、ニューヨーク金融市場は圧倒的な優位性をもつ国際金融市場として確立されることがなかった。初期のユーロ・달러市場を主導したのは、ロンドンの国際銀行業マーチャント・バンクであった。その後1960～70年代を迎えると、マルチナショナル・バンク(multi-national banks)、コンソーシアム・バンク(consortium banks)あるいはユーロ・バンク(Euro-banks)などの名称で呼ばれた新たな多国籍国際銀行の一群がユーロ・달러市場を支配するようになった。

1980年代の「金融ビッグ・バン」以降は、マーチャント・バンクは証券ブローカーやジョバーを吸収合併する形で、発行証券の国際的な販売網の形成へと向かった。顧客からの注文の執行、広範囲な証券の売買、市場へのプレズメントや引受、資金管理やファンド・マネージメントと、証券に関連するあらゆる業務を総合的に取り上げるユニヴァーサル・バンクや金融スーパーマーケットに業態を転換させることを目指した。この結果、マーチャント・バンクは保有する発行証券の価格変動リスクに対処するために、十分な自己資本力を保持することが不可欠となった。このため、英国の金融制度の伝統的な特徴であったロンドン手形交換所加盟銀行、マーチャント・バンク、証券ブローカー、ジョバーなどの棲み分けがなくなり、さらには米系、欧州系、日系などの外国銀行が金融市場で入れ乱れ、ユーロ・ポンド市場(オフショア的なロンドン金融市場)はどの分野にも参入可能な自由度の高い競争的な国際証券市場に変化を遂げた。本研究では、ユーロ・달러市場とユーロ・ポンド市場の変遷を中心にして、ロンドンに見られた金融機関と金融市場構造の変貌について具体的に解明がなされた。

〔追記1〕研究成果の一部の刊行：本科研費にもとづく研究成果として、19世紀後半から戦間期に至るまでの時期の国際銀行業を対象にした、西村閑也・鈴木俊夫・赤川元章編『国際銀行とアジア 1870～1930』が慶応義塾大学出版会から、2009年度中に刊行される。その内容と執筆者は、以下の通りである。

第1編 序論：第1章 第一次グローバリゼーションと国際銀行(西村閑也)、第2章 国際資本移動と労働移動(菅原歩)、第3章 海底電信線の敷設と国際銀行(鈴木俊夫)、第4章 国際銀行とロンドン金融市場(鈴木)、第5章 銀本位制から金本位制へーアジア

諸国(西村雄志)；第2編 英系国際銀行：第6章 英系国際銀行の前史(菅原)、第7章 英国東洋銀行 1842～1884年(鈴木)、第8章 香港上海銀行 1865～1913年(西村閑)、第9章 香港上海銀行ハンブルク支店(蕭文嫻)、第10章 チャータード銀行 1858～1890年(北林雅志)、第11章 チャータード銀行 1890～1913年(西村閑)、第12章 チャータード・マーカンタイル銀行 1853～1892年(北林)、第13章 マーカンタイル銀行 1893～1913年(西村閑)、第14章 英系国際銀行のパフォーマンス(北林)；第3編 非英系国際銀行：第15章 ドイツ銀行・独亜銀行 1870～1913年(赤川元章)、第16章 露清銀行・インドシナ銀行 1896～1913年(矢後和彦)、第17章 横浜正金銀行 1880～1913年(西村雄)；結語(編者)

〔追記2〕研究成果の一部の英語化と国際学会における報告：本研究成果の一部は英語化されて、後述の海外研究協力者の参加を得て、ユトレヒトで開催される第15回世界経済史会議(XVth World Economic History Congress)の2009年8月7日開催のセッション(P9)において“International Banking in Asia, 19th-20th Centuries”として報告される。なお、2008年9月24～25日に三浦郡葉山町湘南国際村において、国際会議「19世紀と20世紀アジアにおける国際銀行業International Banking in Asia 19th-20th Centuries」を開催し、本科研費研究メンバーと海外研究協力者が報告と討論を行った。この結果、これまで研究史が乏しかった、19世紀および20世紀の国際銀行のアジアにおける営業活動の実態や特質を比較史的に解明することが出来た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計19件)

① Makoto Kasuya, “The Activities of a Japanese Bank in the Interwar Financial Centers: A Case of the Yokohama Specie Bank”, [東京大学] CIRJE-F-610, pp. 1-28, 2009 査読無

② 赤川 元章「近代中国とドイツ・アジア銀行」[慶応大学]『三田商学研究』51-1, pp. 19-41, 2008 査読無

③ 粕谷 誠「江戸時代の金融ビジネス」, CIRJE-J-190, pp. 1-29, 2008 査読無

④ 鈴木 俊夫「ロンドン割引市場と外国手形の引受」『三田商学研究』49-6, pp. 91-102, 2007 査読無

⑤ 赤川 元章「ドイツ・アジア銀行の財務諸

表の構成と本支店間の取引関係」『三田商学研究』50-1, pp. 156-172, 2007 査読無

⑥入江 恭平「ユーロ域の企業金融と資本市場の変貌」〔中京大学〕『中京経営研究』17-1・2, pp. 53-67, 2007 査読無

⑦菅原 歩「リオ・ティント社の対カナダ投資、1952-1956年—鉱業多国籍企業の形成過程」『経営史学』42-2, pp. 3-29, 2007 査読有

⑧菅原 歩「戦間期中国における米系国際銀行—International Banking Corporation 北京支店、天津支店、広東支店」, [東北大学] Tohoku Management & Accounting Research Group, Discussion Paper, 78, pp. 1-19, 2007 査読無

⑨西村 雄志「19世紀後半のグローバリゼーションとヘゲモニー国家イギリスの役割—「国際公共財」としての国際金本位制の機能と展開を中心に—」〔松山大学〕『松山大学論集』18-6, pp. 119-153, 2007 査読無

⑩Kazuhiko Yago, "Wicksellian Tradition at the Bank for International Settlements: Per Jacobson on Money and Credit" 『経済学史研究』48-2, pp. 1-18, 2006 査読有

⑪Kazuhiko Yago et Shizuya NISHIMURA, "La masse monétaire en France (1890-1913)", in *Histoire, Economie et Société*, 2, pp. 195-211, 2006 査読有

⑫菅原 歩「ユーロダラー市場の形成と英系海外銀行、1957-1963年—The Bank of London & South America (BOLSA) の事例—」, Tohoku Management & Accounting Research Group, Discussion Paper, 74, pp. 1-26, 2006 査読無

⑬西村 雄志「20世紀初頭におけるアジアの通貨制度の展開と植民地支配—準備的考察—」〔大阪歴史科学協議会〕『歴史科学』184, pp. 14-20, 2006 査読無

⑭鈴木 俊夫「オリエンタル銀行設立の一齣」『三田商学研究』48-5, pp. 41-61, 2005 査読無

⑮平岡 賢司「再建国際金本位制と脆弱化するポンド」〔信用理論研究学会〕『信用理論研究』23, pp. 65-86, 2005 査読無

⑯矢後 和彦「現代—フランス(2004年の歴史学界—回顧と展望—)」『史学雑誌』114-5, pp. 378-381, 2005 査読無

⑰Masanori Sato et Kazuhiko Yago, "L'Elite manageriale au Japon: le cas des banques" *Entreprises et Histoire*, 41 pp. 71-81, 2005 査読有

⑱Makoto Kasuya, "Continuity and change in the employment and promotion of Japanese white-collar employees: The case of the House of Mitsui", *Enterprise & Society*, 6-2, pp. 224-253, 2005 査読有

⑲西村 雄志「20世紀初頭の海峡植民地にお

ける通貨制度の展開」『歴史と経済(旧・土地制度史学)』188, pp. 33-49, 2005, 査読有

[学会発表] (計11件)

①Ayumu Sugawara, "Rio Tinto Company's Investments in Australia in the 1950s", Asia-Pacific Economic & Business History Conference, 19 February 2009, Gakusyuin University

②Toshio Suzuki, "The Oriental Bank Corporation & the Decline of Silver Price, 1842-1884", International Banking in Asia 19th-20th Centuries (Zushi International Banking History Conference), 25 September 2008, Shonan Village Center

③Motoaki Akagawa, "The Deutsche Bank and the Deutsch-Asiatische Bank in the East Asia (1870-1913)", International Banking in Asia 19th-20th Centuries (Zushi International Banking History Conference), 25 September 2008, Shonan Village Center

④Kazuhiko Yago, "The Russo-Chinese Bank (1896-1910): an International Bank in Russia and Asia", International Banking in Asia 19th-20th Centuries (Zushi International Banking History Conference), 25 September 2008, Shonan Village Center

⑤Makoto Kasuya, "The Activities of a Japanese Bank in the Interwar Financial Centers: a Case of the Yokohama Specie Bank", International Banking in Asia 19th-20th Centuries (Zushi International Banking History Conference), 25 September 2008, Shonan Village Center

⑥Takashi Nishimura, "The Business of the Yokohama Specie Bank in Osaka-Kobe Area before 1913", International Banking in Asia 19th-20th Centuries (Zushi International Banking History Conference), 25 September 2008, Shonan Village Center

⑦Ayumu Sugawara, "International Banking Corporation, 1902-1937", International Banking in Asia 19th-20th Centuries (Zushi International Banking History Conference), 24 September 2008, Shonan Village Center

⑧Kazuhiko Yago, "La coopération des banques centrales après la Deuxième Guerre Mondiale: stratégies comparées entre le Japon et la France", 日仏中央銀行シンポジウム Banque de France, 8 janvier 2008, Banque de France (Paris) Banque du Japon: Regards Croisés

⑨鈴木 俊夫「東洋銀行 1842-1884年」日本金融学会2007年度秋季大会(金融史パネル:「国際銀行とアジア」)20

07年9月8日同志社大学（今出川校舎）

⑩菅原 歩「インターナショナル・バンキング・コーポレーション 1902-1937」日本金融学会2007年度秋季大会（金融史パネル：「国際銀行とアジア」）2007年9月8日同志社大学（今出川校舎）

⑪Kazuhiko Yago, "Monetary and Financial Cooperation in Asia: market and institutions", International Economic History Congress, 21 August 2006, University of Helsinki

〔図書〕（計16件）

①鈴木 俊夫「第4章 明治期日本の民営たばこ産業と国際競争」湯沢威他編『国際競争力の経営史』有斐閣, pp. 81-105, 2009

②入江 恭平「ユーロ債市場」日本証券経済研究所編『図説イギリスの証券市場 2009年版』日本証券経済研究所, pp. 180-201, 2008

③矢後 和彦「露亜銀行(1910-26年)覚書」, 左近幸村編『近代東北アジアの誕生』北海道大学図書刊行会, pp. 163-178, 2008

④菅原 歩「対外金融政策—資本流入の持続可能性」, 河音啄郎・藤木剛康編『G・W・ブッシュ政権の経済政策』ミネルヴァ書房, pp. 157-195, 2008

⑤鈴木 俊夫「第9章 国際銀行史」上川孝夫・矢後和彦編『国際金融史』有斐閣, pp. 285-315. 2007

⑥鈴木 俊夫「外債発行の現場から—ロンドンの高橋是清」鳥海靖編『近代日本の転機』（明治・大正編）吉川弘文館, pp. 173-182, 2007

⑦平岡 賢司「第2章 再建金本位制」上川孝夫・矢後和彦編『国際金融史』有斐閣, pp. 35-74. 2007

⑧矢後和彦「第10章 国際金融機関史」, 上川孝夫・矢後和彦共編『国際金融史』有斐閣, pp. 321-345, 2007

⑨粕谷 誠「決済ネットワークと金融市場—手形・小切手取引からみた江戸期から大正期への進化」, 大東英祐他著『ビジネス・システムの進化—創造・発展・企業者活動—』, pp. 119-153, 2007

⑩平岡 賢司「国際通貨の歴史と多義性」信用理論研究会編『金融グローバリゼーションの理論』, 大月書店, pp. 104-115, 2006

⑪入江 恭平「変動相場制と金融自由化」信用理論研究会編『金融グローバリゼーションの理論』大月書店, pp. 156~165, 2006

⑫矢後 和彦「ユーロ・カレンシー市場と国際決済銀行—1950-60年代の新自由主義と国際金融市場—」, 権上康男編『新自由主義と戦後資本主義—欧米における歴史的経験—』日本経済評論社, pp. 369-495, 2006

⑬西村 雄志「アジアから展望した近代国際通貨制度の形成」, 市川文彦編『史的に探

ると言うこと！』関西学院大学出版会, pp. 55-65, 2006

⑭鈴木 俊夫「日露戦時公債発行とロンドン金融市場」, 日露戦争研究会編『日露戦争の新視点』成文社, pp. 84-103, 2005

⑮鈴木 俊夫「日露戦争前夜の武器取引とマーチャント・バンク」奈倉文二・横井勝彦編『日英兵器産業史』日本経済評論社, pp. 69-110, 2005

⑯北林 雅志「第1章 ローカル・バンクからアジア最大の銀行へ」, 『中国の銀行』からグローバル・バンク HSBCへ』, 青野正道他著『金融サービス企業のグローバル戦略』中央経済社, pp. 33-101, 2005

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 俊夫 (TOSHIO SUZUKI)
東北大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号 00139982

(2) 研究分担者

菅原 歩 (AYUMU SUGAWARA)
東北大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号 10374886

(3) 連携研究者

赤川 元章 (AKAGAWA MOTOAKI)
帝京大学・経済学部・教授
研究者番号 60051603

平岡 賢司 (HIRAOKA KENJI)
熊本学園大学・商学部・教授
研究者番号 20128820

入江 恭平 (IRIE KYOHEI)
中京大学・経営学部・教授
研究者番号 80232627

北林 雅志 (KITABAYASHI MASASHI)
札幌学院大学・商学部・教授
研究者番号 60169878

矢後 和彦 (YAGO KAZUHIKO)
首都大学東京・都市教養学部・教授
研究者番号 30242134

粕谷 誠 (KSUYA MAKOTO)
東京大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号 40211841

西村 雄志 (NISHIMURA TAKASHI)
松山大学・経済学部・准教授
研究者番号 10412420

(4) 研究協力者

西村 閑也 (NISHIMURA SHIZUYA)
法政大学・名誉教授
蕭 文嫻 (SYU MA-AN)
大阪経済大学・経済学部・講師（非常勤）

Youssef Cassis
Professor, University of Geneva
Ranald C. Michie

Professor, University of Durham
Herbert Bonin

Professor, University of Greth-Bordeaux